

研修タイトル:オランダAddiction研修 行先:オランダ 期間:3/7-3/12

引率:高野 歩 特任助教(精神衛生・看護学教室)
郡 健太(健康科学コース4年)
千葉 一輝(健康科学コース4年)
佐瀬 満雄(看護学コース3年)

渡航先での活動内容(郡)

3/8 Mentrumの外來/入院施設
アウトリーチ部門ではACTとJOTのチームが存在する入院施設は併存精神障害ごとに階層が分かれている



3/11午前 ドラッグユーザー支援団体Mainline

特にユーザー向けの情報提供に力を入れている。パンフレットでは比較的 안전한注射の方法や、使用者のインタビュー記事、感染症対策など。薬物や性への理解を促進するボードゲームも開発



3/11午後 ドラッグユーザー支援団体MDHG

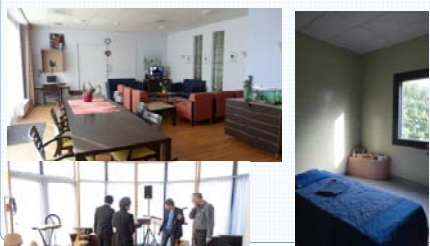
当事者スタッフ(peer-educator)とディスカッション



3/10 GGD Local Health Department
医療/社会支援、デイケア、住居支援など依存症当事者に必要なものを統合したパッケージを提供している。ハードドラッグを厳重に管理された環境で医師の処方する比較的安全的なヘロインやメサドンに置換、減量することもできる



3/9 午後 入院型治療施設 Novadic-Kentron見学



3/9 午前 Iriszorgオフィスおよび付属の医療ヘロインユニットの見学



目的を達成できたか(千葉)

非常によく達成できた。オランダの薬物依存の問題と医療システムについて、私たちは、深く、幅広く、背景まで知ることができた。

「深く」 Consumption Roomや病院の隔離室など、**普通の旅行では見ることのできないもの**に数多く触れることができた。

「幅広く」話を聞いた人だけでも、医師、看護師、心理職、ドラッグユーザーの支援団体の人や当事者など、**多様な立場の人**から話を聞くことができた。都市と地方の状況の違い、組織ごとの立場の違いなどを知ることができた。「背景まで」日本とオランダの文化の違い、人口の違い、市中に大量にあるCoffee Shop(薬物を吸える店)、街頭ですれ違う葉巻を吸う人やその匂いなど、**オランダの薬物依存問題の背景**が日本と違うことを肌で感じた。

グローバルな視点とは何か(千葉)

自身の価値観や立場を相対化し、より多くの視点や立場から、広く物事を捉えること。 今回の旅で、私たちは二つの意味で今まで触れたことがない新しい世界に飛び込んだ。一つは薬物依存、もう一つはオランダである。薬物依存という複数のイデオロギーが対立する難しい領域で、様々な立場から今起きている現実立ち向かう人々の姿に触れた。オランダのHarm Reduction政策が良いものかどうかについて、学生の中でも合意は取れなかったが、今回の旅を通じて多様な考え方や選択肢に触れたことで、今までより、はるかに広い可能性を含めた議論ができるようになった。

目的以外に学んだ点、反省点(千葉)

オランダは、言葉や常識が「通じないのが当たり前」だったこと。日本にいるときは、その場の注意書きや暗黙のルールを「理解していることが当然」だと思っていた。今までグローバルコミュニケーションと聞くと身構えてしまっていたが、全く理解し合えないのが普通であって、自分が考えていることの少しでも伝えられればいいのだ、と考え方が変わり、海外への恐怖心が薄らいだ。

将来の進路決定へどう影響したか(佐瀬)

- ・海外で働くことや、異文化圏で生活する人々とかかわる仕事に魅力を感じるようになった。
- ・薬物依存の人々を支援するモチベーションが上がった。

後輩へのアドバイス(佐瀬)

このオランダ研修は、薬物に関する知識や英語のスキルなど問わず、どんな学生にとっても得るものがあるが、より実り多きものにするためには：
・日蘭の薬物関連の基本的な情報は抑えておく。
・簡単な英語のディスカッションはできたほうが楽しい。
・先方へのお土産は日本らしいものが喜ばれるが、英語で説明することを念頭に置いて選ぶとよい。

研修支援制度に望むこと(佐瀬)

もちろん初参加の学生が優先ですが、同じ研修コースにもう一度参加することができれば、より理解が深まると思います。

